

## 子育てと研究の両立の一つの選択肢としての単身赴任 大阪大学たんぱく質研究所 篠原 美紀

### 1. 序

面接の待合いの長いすで、これからの3年間の研究計画を5分間でいかに手際よくわかりやすく説明するか、何度も何度も頭の中で繰り返して、ふと、きっと今の私ってとても間抜けな顔をしてる？と考えた。となりを見ると学科の同級生がやっぱり宙を眺めながら少し間の抜けた顔をしていた。「ねえ、私、一目で妊娠してるってわかるかなあ？ただ太ってるって言ったら通用する？」「う～ん、どうかな？」同級生は一言だけ答えてまた宙を眺めた。男に聞くだけ無駄だ。彼らは自分たちが絶対に妊娠しないことを知っている。3月の予定日、4月から特別研究員として研究ができるのか、と面接の先生に聞かれたら？できるかどうか自分にだってわからない。出産も子育ても初めてでどれくらい大変なのか、研究と両立できるのか本人だってわからない。だいたいちゃんと子供を産めるのかなあ。「研究者になりたいので、がんばります」言えるのはそれだけ。学術振興会特別研究員の面接選考会場、妊娠8ヶ月の大きなおなかを抱えて臨んだ、これが私のキャリアとライフサイクル両立の出発点だった。

はじめ、キャリア形成とライフサイクルというテーマで話してほしいというお話をいただいたとき、まだ、確固たるキャリアを築けていない私が話すのはどうか？と思い、発展途上の私の立場からの意見でよろしいのですか、とお返事したところ大坪久子先生は「発展途上っていうのがおもしろい」とおっしゃいました。今まさに、キャリアを築かんと、もがき苦しんでいる渦中の者のリアルタイムのおもしろさや迫力が出せれば、そして、今、私と同じようにもがいているひと、そして近い将来この渦に巻き込まれる若い人たちにほんのわずかも力になればと思っています。

### 2. 大学院生での妊娠と出産

私は、大学院修士2年で結婚して、主人と同じ大阪大学の小川英行先生の研究室で博士論文の研究を行っていました。主人が助手で、小川智子先生がその当時、まだ講師でいらっしゃいました。来週、共同研究でシカゴ大学に2ヶ月ほどいくことになっているのに、体調が優れなかった私は病院に行ってみると

妊娠しているということでした。気持ちは・・・はあ？私で妊婦は3人目。研究室は隔年で誰かが妊娠していて妊婦がいるのは珍しくも何ともないという状況。小川英行先生と智子先生はおめでとうと、ちょっと驚きながらもうれしそうに言ってくださいました。家族以外に言われた初めての「おめでとう」でとてもうれしかったのを覚えています。でも、いま思えばボスに言っても喜んでもらえるはず妊娠の報告ができる。それこそ私が、恵まれた環境にいることの証でもあったと思います。

帝王切開での出産になったので子供を産んでから1ヶ月間、休みを取りました。2ヶ月目からは夫婦で話し合って1日2交代で昼間は私が家にいて、午後6時以降は主人が帰ってきて私がラボに行くことにしました。でも、結局、仕事のできたのは子供が連続して眠ってられる最大3時間だけ。すぐに電話がかかってきて、電話の向こうでは「ぎゃあー、ぎゃー」という娘の泣き声。「だめだ」帰ってみるとひたすら泣き続ける娘と、その傍らですべてを試してみたものの、敗北して泣き出しそうな夫の顔。協力しようと一生懸命になる夫の気持ちを踏みにじるかのように私が抱くと泣きやむ娘。父親ではどうにもならないこの時期、仕事にはならなかったけれど研究に戻るために子供から離れる心構えのできた時期でした。

### 3. 保育所を利用した時期

娘が生後3ヶ月目に入ったときから、小学校に上がるまで保育所を利用しました。入所式の時の園長の言葉「子供に申し訳ないと決して思わないでください。子供と一緒にがんばっているのだと親が思うことが大切です。」保育士さんたちは、他人の子供の世話をするために自分の子供を他の保育所に預けて仕事を続けています。とても強い気持ちがないとできない仕事だと思いました。保育のプロとして、働くお母さんの先輩として実にいろいろと勉強をさせて頂きました。ラボでの研究はというと、お迎えの時間があるので実験はキチンと時間通りに終わらせなくてはなりません。短い時間にいくつもの実験を分刻みで同時進行で進める、毎日がスリリングな研究生活でした。ただ、時間に余裕のあるほかの人たちと10分の遅れが致命的な私と、予約時間になっても空かない機械にカリカリ腹を立てたこともありました。随分周りには迷惑をかけながら何とか学位を取ることができました。

その後は、主人がシカゴ大学に職をとったこともあり、子供を連れ、シカゴ

大でポスドク先を見つけ3人でアメリカ生活を送ることになりました。私が行った Bishop Lab はのんびりとしていて、それが私の研究者キャリアとしてはプラスだったかは別として、子育てをしながらでも全く余計なプレッシャーを感じずに研究に集中できた時期となりました。気がつくとも子供は起きているほとんどの間、保育所で英語での生活をしていたため英語しかしゃべれなくなっていました。日本に帰るなら早く帰らないと子供が日本に適応できなくなる。子供の教育問題から我々は帰国をすることに決めました。

#### 4. 私の就職問題

そこで問題になったのが私の職です。主人は大阪大学に籍を残していたので帰るだけだったのですが、私は結局、それでも周りの相当な尽力により派遣社員として同じ研究室で働くことになりました。それでもいいと思った時期もあったのですが、やはりいろいろな場面で実に不安定な立場であることを思い知らされることがありました。そんなときに広島大学での助手の話があり、いろいろと悩んだあげく受けることにしました。私が単身赴任をすることは意外とあっさりと決まりました。というのも、大阪には私の実家があり応援が頼みやすいこと。主人には、一緒に働くテクニシャンや学生がたくさんいてその当時すでに自分ではほとんど実験をしていなかったことなど主人の方が、何かと条件が整っていました。そして何より主人が一人で娘の面倒をみることに對してあまり抵抗がなかったというのが大きな理由です。結婚以来、夫婦の間で特に取り決めはしない方なのですが、「二人のうちどちらかでないとできないこと」を作らないことだけは努めていたように思います。家事においても子育てにおいても。

#### 5. 単身赴任の始まり

そうして、私の単身赴任生活と主人と娘の父子家庭生活が始まりました。私は、子供と会えないことが寂しいと思う一方では、大学院生以来、研究に没頭する、ある意味では充実した生活を手に入っていました。それでも、うまくいかないことがあると子供に寂しい思いまでさせていったい私は何をしているのだろうと思ったり、子供に寂しい思いまでさせてやっていることなのだから手を抜かずにがんばろうと思ったり。きっとやってこられたのは、離れていても主人と娘も一緒にがんばっていてくれたからだと思います。広島に行くときに

約束したことがいくつかあります。子供の前では広島に「行く」、家に「帰る」の表現を徹底する。毎日、電話をする。日曜は毎週帰る。そして、チャンスがあれば一緒に住めるように努力する。経済的負担は大きく、生活費を稼ぐための仕事としては成り立たない、単身赴任の期間でしたが私のキャリアと呼べるものがようやくうっすら積もりはじめた3年間でした。

この話を分子生物学会の26回年会で行ったときには単身赴任がいつまで続くのかわからない状況でしたが、現在は大阪で子供と主人と3人で生活し、主人と同じラボで助手として研究生活を送っています。研究者のキャリアとしては主人の下で研究を行うことが決してよいことだとは思いません。でも、私のキャリアのためだけに家族に長期の負担を強いることも私の本意ではありません。また、子供が大きくなったら研究に没頭できる時間を手に入れよう。

## 6. 終わりに

ここまで、私の思い出話のようなとりとめのないエピソードを綴ってきました。研究と出産、子育てというどちらか一方でも大変な仕事を一時期にこなさなければならない30歳前後の女性研究者の一例としてみていただければと思います。ただ、改めて活字にして読んでみると、ここまでそんなにつらい思いもせず、順調に（その時々には決して順調だとは思っていなかったのですが、かなり順調？）ここまでこられたのは恵まれた環境があったからだと思います。妊娠をおめでとうと言ってくれるボス。妊婦がいることを特別と思わなかった研究室。やるからにはとことんやれと言ってくれた両親。いろいろと励ましてくださった保育士さん。子供を産んでも誰一人専業主婦にならない友人たち。大きな病気もせず、保育所に行くのを一度もいやだと言わなかった娘、そして、何でも一人でできるよ、とってくれた夫。研究面で大きなサポートをしてくださった広島大学原医研の先生方。いつか、我が身が安定したらサポートする側に回りたいと願っているのですがいつになるのやら。いま、もしも私の研究スタッフに妊娠しましたと言われても、おめでとうと言いながらも実は死活問題だったりするわけで……。早く、心から喜びサポートするだけの度量を身につけたいものです。

## 7. 顛末記

さて、妊娠8ヶ月での学振の面接は、ATPase についての質問を受けただけで

あっけなく終わってしまいました。同級生に「何もおなかのこと聞かれなかったよ。妊婦だって気づかなかったのかな？」ちらっと私をみた彼は「それは、ないやろ」。子供を産んでからも私が研究を続けると信じて学振を通して、研究者としてスタートを切るチャンスをくださった面接官の先生方に感謝しています。私はこれからもその期待に応えられるように、そして、これからスタートを切ろうとする若い女性研究者にも多くのチャンスが与えられますように。